

憲法と映画(102) 『教皇選挙』

(2024年 アメリカ・イギリス合作)

<の>



フランシスコ・ローマ教皇が4月21日に88歳で亡くなりました。

2013年に選出されてから約12年間カトリック史上初の中南米出身の教皇でした。コンクラーベ(教皇選挙)で第266代教皇として信者14億人の頂点に選ばれたのです。同性婚カップルを認めたり、核兵器禁止条約をバチカンとして批准するなど改革派の教皇として知られています。2019年には日本も訪問しています。

時を同じくしてエドワード・ベルガー監督の『教皇選挙』が上映されています。ローマ教皇の死を予見したかのようなタイミングでの劇場公開です。教皇には、「枢機卿」と呼ばれる教皇の最高顧問約130

名の互選で、2/3以上の票を獲得できなければなりません。しかも枢機卿は全員男性です。映画では、システーナ礼拝堂に鍵が掛けられて密室の中で選挙が行われる様子がリアルに描かれていきます。金属製で背の低い甕(かめ)の蓋に投票用紙を乗せて中に滑り落とす投票方法も映画で初めて知りました。教皇候補の若い時のスキャンダルが明らかになったり、多数派工作のための様々な陰謀が繰り広げられます。何度となく繰り返される選挙は、煙突から立ち上る煙の色で世界中に知らされますが、黒い煙(未選出)ばかりが立ち上ります。選挙責任者であるローレンス枢機卿の胸を締め付けられるような激しい息遣いは、観客と共鳴して緊張がピークに達します。まさにコンクラーベは「根比ベ」です。映画ではアツと驚く人物が教皇に選ばれますが、未だご覧になっていない方のために結末は書かないでおくことにします。

現実の教皇選挙は、5月7日に開始されます。この原稿がホームページに載るころには新しい267代教皇が決まっていることでしょう。(5月1日記)